

この魚は常に砂の中にひぐり込んで躰をかくして
ぬまして唯頭だけを砂の上へ出し静かにこの鬚を
動かしてゐます。そうしますとこの鬚の先端につ
いてゐます肉の切の様なものは静々動きまして丁
度小さな虫の様に見えます

これを他の小さな魚がみますとよい食物があると
おもつてそつと此肉切を食いに参ります、すると
アンコウは段々この肉切を自分の口の近くへ持つ
て参りまして魚を口元へ誘ひ來り不意に此魚を捕
つて食います。

(未完)



史傳

大題小題 二

サーモビレーの戰 (承前)

米

溪

レヲニダス、サーモビレーに至るや、フラニシ
ヤ人、オータ山の栗林を通ずる山徑に付て告ぐる
所あり。且つ其の山上の高臺、森深くして地凹め
る故、之を發見するは、決して容易の事にあらず
到底、敵軍の見出し能はざる所なることを保證し
其の地點を守らんことを請ひしかば、レヲニダス
之を許しぬ。斯くて營を温泉水清き流を繞り
て張り、破壊せる往古の城壁を修覆し、専ら會戰

の準備をなせり。

ペルシヤの軍二百萬、野に充ち、山に互り、踏み轟かす馬蹄の響、地を動かし、煽り起す砂煙、天日を蔽ひ、旗手の靡さ、銅鑼の音、國內を震はして、渾土を搖りぬ。南方希臘人の心は沈み初めぬ。謂へらく、ペロポネサスに於ける彼等の家は、比較的は無難なれば、寧ろ退て、コリンス地峽を防守するは、自衛の策に於て、却て得たるものにあらざるかと。然れとも、レヲニダスは、假令スバルタは地峽の下に安全なりとはいへ、之を以て、北方同盟の諸國を棄つるは、其の忍ぶ能はざる所なれば、其の守備に對しては、援助の兵を送り、唯ペロポネサス人を止めて、其の任に當らしめぬ。

波斯の軍、次第に進み、龍攘虎鬪期迫りぬ。而

して波の騎兵斥候は、一の報告を齎らしたり、曰く、前方、墻壁の内は、到底、知る能はざるも、其の前面掩堡に於て、スバルタ人は、或は活潑に嬉戯し、或は互に其の長髪を梳れりと。

大軍境を壓して、存亡の機眼前に在り。而も愆々尙是の如きものあり。誰れか疑訝を其の間に挟まざらんや。サーキジス、此に於て、スバルタの叛者、デマラタス(デマラタスは、スバルタの太子なりしか、遂はれて國に叛き、却て敵の輔佐として勤むるもの)を召し、問て曰く、今や、我れ、大軍を率ひて此の境に臨む、而して彼等、尙兒戲をなして奔竄を忘る、氣顛せしにあらざるば、神喪したるなからんやと。

デマラタス之を否定して曰く、之れ死憤の勇を以て戦はんとするのみ。死を冒し、難に臨む、彼

等、必ず先づ、其の頭髮を理せずんはあらず、之
スバルタ人の風習のみと。

サーキジス未だ信せず、謂へらく、眇たる孤
軍、何ぞ克く我が兵勢を支ふるの企をなし得んや
と。此に於て、海軍の到着を俟ち、水陸一時に並
び攻んとし、待つこと四日、未だ來らざりしかば
陸上の運動は遂に初まれり。

強壯にして、堅牢に身を固めたる希臘人、豈短
槍と、編たる楯に匿くる、波斯人の敵ならんや。
飛び交ふ矢は、蝗の如く、撃ち合ふ劍は、電光石
火、鋒鏖既に交はりて、波斯兵屢退く、傳聞す
當時サーキジス、雪崩を撃て逐ひ退けらるゝ、自
己の軍を見、失望の極、榻に安んずる能はず、起
て跳躍扼腕するもの三度、突撃効を奏せず、喊聲
徒に震ふるも、希臘の陣地は、牢として抜くべか

らず。空しく天際を睥睨じて、且暮を送ること
二日。難い哉、勃々たる野心を逞うせんとして、
無智の民を驅り、軍務に使役し、勇敢、恐るゝを
知らず、義膽白虹を生ぜんとする健兒に對して、
壓迫、巨岩の鶏卵に於けるが如くならんとするこ
とや。

天平命乎、デルフアイの讖言兆をなし、スバル
タ同盟軍を繞る悲風は、吹き初めぬ。……………
夕陽既に暮きて、蒼然なる暮色、天地を包み、濤
聲遙に互りて、山岳答へ、幾十里を壓する陣營、
黒く丘陵と化せんとして、篝火劍戟に映し初むる
頃、哨兵に誰何せられて、波斯軍に誘致せられし
ものあり。

國亡びんとして、老幼内に轉輸に勞し、大軍境
を壓して、壯丁役に苦むも、兄は弟を警めて、國

に許し、妻は夫を勵まして、國に捧ぐ。子豈獨り父に恐ばんや、弟將た兄を思はざるにわらずと雖とも、一朝國家滅びんか、明日は之亡國の氓たらんとす、殘虐訴ふるに所なく、四隣散亡し盡さずんばわらず。天に哭するも、此に至りては益なきなり、地に蹉跎するも、此に至りては何の補かある。恐ぶべからざる所之のみ。敵愾の心疑る所以のもの之のみ。一人のスパルタ人にしても、血温かなる間は、決して敵の前に頭を屈せざらんとす。咄何者の賣國奴ぞ、敢て國を忘れて、獨り私利を計り、不義の富に酔ふて、大逆の臺に、榮耀の夢を貪らんとす。咄々、何者の逆賊ぞ、エファリアルツ、愚と云はんか、蒙と名けんか、否々彼は遂に、天地容れざる大姦たり、國家の難を幸として、國を賣りしものなり。天も許さざるべし、

地も容れざるべし、人豈克く其の終を全うせしめんや。其の粟を食て、其の國を忘れ、其の土を踏て、其の恩を顧みず、山川長へに恨を吹て、今に至る迄、風雨其の姦を鳴さずんばわらざるなり。

武士の

矢なみつくくらふ小手の上に

あられたばしる

那須のしの原

實朝